



西垣文庫
文庫10
7356
5



特 文庫10
7356
5



日
新聞才五輯

慶応四年辰五月一日出板

○羽州戦争の様相ハ略第二輯ニ来状の抜唇をの
せしむ其後稍委敷も報告を得たる故ニ又よ
ゝと志す

閏四月四日城内の脱走人天童織田侯の城ニ迫り戦争
ニ及びしが天童降し落城せりけし時上ノ山ニ在る者多ク薩
長勢合せし三百人元仙臺ニ在陣此れを少き沢三位
殿を大将として急ニ天童ニ押寄せ同六七日の以愈近
つも城内勢と大ニ戦ひ散くニ打ち敗るも即死八十人



計り其餘ハ何方へ引去るや同月十二日の以てハ
 仙臺へハ一人も皈ざる由あり又其時官軍より急ニ仙
 臺へ向る黒田勢中て応援を告来る由より早速同処よ
 り操出せしむと途中より何方へ向ひしや是亦行術
 志々りとも尤右の戦争中天童ハ城下を焼拂りて家中
 農高此殺戮大方あり殊ニ織田侯を始メ奥方女中一
 同立退らるる何せハ倉卒狼狽きく有程とて憐
 れり折しと其中小妾の産後ハ日数立りしと
 馬駕の自由も叶もさせハ徒行して仙臺の近在に遁来
 るりせハ仙臺候あつたを聞きしに金と米とを贈り厚

く扶助せしめしとそ又當時ハ仙臺より官軍ハ皆何
 方へ散せしや残れるもの甚と少かく尤九條殿ハ岩沼
 在陣のよしあり

会津追討として兼り仙臺より操出する人殺凡二万
 余人秘中将殿も国境まで出張せしむりし四月
 廿八九日の頃同国信夫郡土湯あつたの境より少し南に
 是迄ハ代官と同一く石楚いしかとの二ヶ所にて仙臺の番
 兵と聊ツとの小ざり合ありしやして怪我人も仙臺
 してハ僅よ一人有りしのみとあつた戦争といふ程

あしとやうに狂才四輯み載せたる奥羽諸侯の款状書ハ
仙臺岩沼在陣の大総督九條殿に落参の由りて越
つて過く人殺も操りたるよし

○ 閏四月十二日東海道三島宿より来状の抜書

當十二日相州足柄下郡真鶴村に侍二百人程上陸い
しは其隊の頭林昌之助様と家来四人並に連跡の人
救いのよし置いぬ大久保加賀守揆に城下は越ら成
重役は面會の上付友徳川家脱走人より貝淵陳屋迄は
焼拂右軍の進撃差迫りしる無事死越に昔々十少は
しと杉栖 徳川家より山岡某為總括に如はる趣に

承以ハ直に城下を引拂駿州の厨に殿場村へ
越成夫より甲府へ可は越はし風関を

右ハ才三輯上総富津の條は林肥後守嫡子云く船よ
のり行衛をそと何るハ定めて此所よりまきけるな
らん

○

一 此頃舟橋辺戦争の跡見分りし官軍方巡検
一節同所 太神宮の社兵火の為は焼失しとるを見
て同社の神主を呼出し其始末并に神体遷坐の事
あはしく聞紀しのに不取敢仮宮造管料として

右神主へ金十七兩与へらせし

○ 閏四月廿九日久留米の蒸氣船一艘品川より人救二百人餘乗組て早天よ出帆し是ハ何國へ赴まるといふ事と詳し

○ 同廿六日上州沼田領般若塚といふ所より官軍と脱走と戦争ありし趣安中の家来より報告り但し勝敗の模様はいまも分らざりし多分官軍勝利のよし

○ 閏四月十一日於京師御達書写

三條大納言

今般徳川□□降伏謝罪奉仰 天裁ハユ付以至仁之
叡慮寛典之由所置被 仰出以間速ニ東下億兆人心安堵
之旨 由沙汰以事 委任可为関東監察使

後四月

江藤 新平

右同断ニ付附属ト仰付事

小笠原唯八
新田 三郎

後四月

○

萬里小路辨

今般為関東監察使三條大納言ニ差下以間為附属東下
仰付事

後四月

○

三條大納言為関東監察使下向ニ
仰付事

松尾 伯耆
中川 對馬
仰出以間附属

右の通りニ仰渡以ニ付速ニ京師發途同月廿四日江
戸へ着入城いとされり

○

閏四月廿二日参謀正親町少将殿、木梨精一郎長州藩其外
官軍百人余り急用何りとして品川宿より御軍艦富士
山より同日九ツ時あり品川沖を出帆し上坂いささ
れより由

同月廿三日開門丸といつる薩州の蒸気船品川沖へ着
帆いささせたり

但し前日載せしる三條大納言殿を初として外六人
の船に乗り来れる由なり

